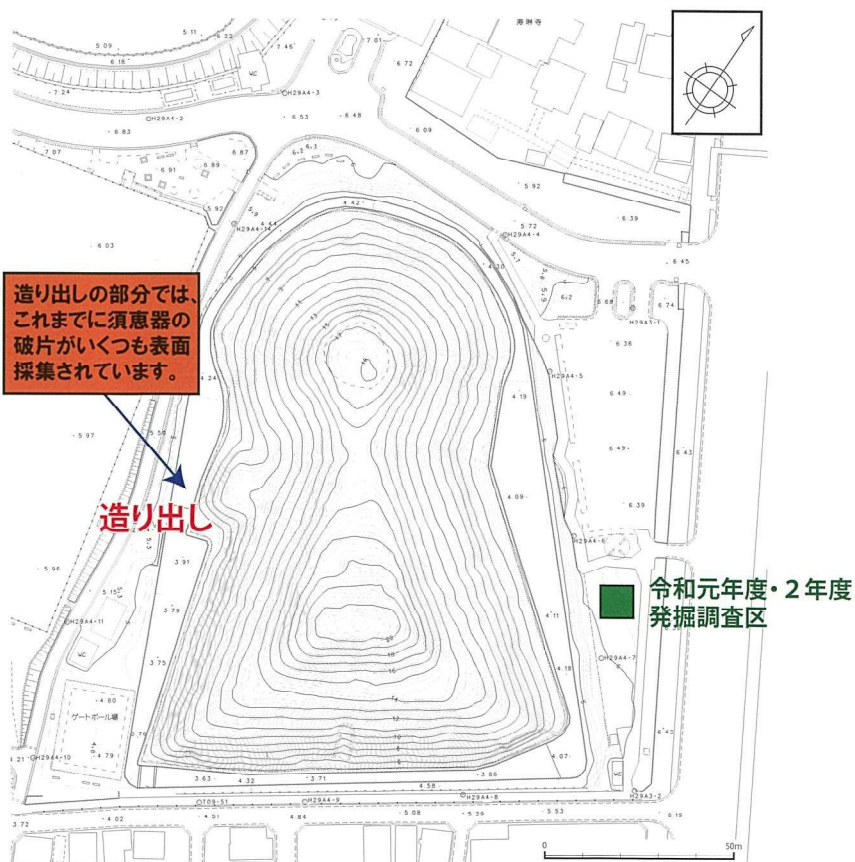


# 愛知県最大の古墳を発掘! 断夫山古墳

志段味古墳群では、6世紀前半に勝手塚古墳が築かれたのち、大型古墳が造られなくなり、同じころ、名古屋市ほぼ中央部に位置する熱田台地の先端には、断夫山古墳をはじめとした大型古墳が築造されます。

断夫山古墳は長さ約151mの前方後円墳です。この規模は愛知県で最大であり、6世紀前半に限ると、大阪府高槻市の今城塚古墳(約190m)に次ぐ規模を誇ります。断夫山古墳は前方部・後円部ともに3段で構成され、片側のくびれ部には造り出しがつきます。特筆すべきこととして、高さ1mを超えると推定される大型の円筒埴輪(展示室にて常設展示)が見つかったこと、墳丘を取り囲む周濠の外側には尾張でも類例が少ない周堤が巡っている可能性があることなどが挙げられます。

断夫山古墳では、これまで正式な発掘が行われたことはなく、埴輪や須恵器が表面採集されているのみでした。しかし、断夫山古墳の範囲や構造の確認を目的として、令和元年度以降、愛知県と名古屋市で共同で発掘調査が進められています。今回の企画展示では、令和元年度・2年度に行われた発掘調査の成果について紹介していきます。



▲断夫山古墳の位置と周辺の遺跡

▲断夫山古墳と令和元年度・2年度の調査区

令和3年 9月22日(水) ▶ 12月12日(日)

会場：体感! しだみ古墳群ミュージアム (TEL: 052-739-0520)

令和元年度・2年度の調査は、墳丘の周りを巡る周濠の範囲を確定させるため、熱田神宮公園の駐車場の南にある芝生広場で行いました。調査の結果、調査前の想定通り、周濠の外側の部分が見つかりました。周濠は熱田台地の地盤面を大きく掘りこんだものです。周濠の肩の部分、およびその外側の周堤にあたる部分については、江戸時代以降に大きく削られていましたが、周濠の底面と周濠の外側との高低差、つまり周濠の深さは2.0m以上になることが判明しました。断夫山古墳の周濠については、これまでも地籍図<sup>せきず</sup>などの検討からその範囲が推定されてきましたが(深谷2009)、考古学的に確認したのは今回が初めてのことになります。

周濠の底部からは、円筒埴輪や須恵器の破片、<sup>ふきいし</sup>葺石の可能性のある石などが見つかりました。このうち円筒埴輪については、全体の規模が分かるものは出土しませんでした。が、<sup>だいたい</sup>橙色で軟らかいものと黒色で硬く焼けているものの両者が出土しました。葺石の可能性のある石については、チャート・<sup>のう ひりゅうもんがん</sup>濃飛流紋岩など、志段味古墳群の古墳の葺石によく使われている石と同様の川原石が出土しました。熱田台地上では川原石を採取できないため、これらは木曾川ないしは庄内川の流域から運ばれてきたものと思われます。

今年度以降の調査では、引き続き古墳の範囲確認を行っていく予定です。周濠・周堤の全体的な形状や、さらにその外側を巡る可能性のある外濠の有無などについて明らかにしていきます。



▲発掘調査の様子



▲周濠の底から出土した遺物



▲埴輪片の出土状況



▲完掘状況(南側から)

参考文献 愛知県教育委員会 1974「断夫山古墳」『重要遺跡指定促進調査報告—地形測量調査の概要—』、愛知県県民文化局文化芸術課文化財室 2020『断夫山古墳発掘調査成果地元説明会資料』、赤塚次郎 1991「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第24集、大場磐雄 1930「断夫山古墳の遺出に就いて」『考古学雑誌』第20巻第1号、名古屋市博物館 2012『尾張氏志段味古墳群をときあかす』、深谷 淳 2009「断夫山古墳の周濠」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第11号、見晴台考古資料館、三渡俊一郎 1983「名古屋市熱田白鳥・断夫山古墳の前後関係について」『古代学研究』第99号、古代学研究会、森泰通・尾野善裕 2003「尾張断夫山古墳の時代」『三河考古』第16号